

24. 人口転換理論の一考察
 —エントロピー・サイバネティックスとの関連—……………麻生 武典 (カリフォルニア州立
 大フラトン校)
25. 静止人口思想に関する一研究—経済学的見地から—……………森 岡 仁 (駒 沢 大)
26. P. A. ヴィクターの大気汚染防除の動学的考え方……………高木 尚文 (帝 京 大)
27. 人口都市化と消費生活行動……………黒田 俊夫 (日 本 大)
- 記念講話「マルサスと私」……………名誉会員 南 亮三郎
- シンポジウム「マルサスと現代世界」
- <座 長> 岡崎 陽一 (厚生省人口研
 森 岡 仁 (駒 沢 大)
1. 先進国におけるマルサス……………岡田 實 (中 央 大)
- <討 論> 皆川 勇一 (千 葉 大)
2. 開発途上国におけるマルサス……………大淵 寛 (中 央 大)
- <討 論> 畑井 義隆 (明 治 学 院 大)
3. 社会主義国におけるマルサス……………吉田 忠雄 (明 治 大)
- <討 論> 黒田 俊夫 (日 本 大)

1984年度米国人口学会 (P A A)

1984年5月3日から5日まで、米国のミネアポリス州都ミネアポリス市にて米国人口学会 (Population Association of America) が開催され、本研究所から人口政策部長河野稔果が出席する機会を得た。

米国人口学会の活動状況については、河野が昭和55年度の『人口学研究』(日本人口学会機関誌)に、「アメリカ人口学の最近の動向」として紹介したことがあるが、その会員は約3,000名で、日本人口学会の会員に比べて約10倍の会員を擁し、その発表種目の多彩なことでは、この種のナショナルな人口学会としては世界で断然一位の実績を持つ学会である。すでに、その紹介で明らかにしたように、米国人口学会はその視座がグローバルであり、米国だけに通用することなく、世界全体に普遍的に通用する、世界の最尖端に行く研究業績の発表で世界をリードする学会である。とくに発展途上国の人口研究を手広く、詳細かつ精緻に行っていることで定評がある。

もう一つの秀れた特徴は、若い優秀な人口学者が、発表者としてあるいは討論者として参加していることであり、その意味では国際人口学会の発表者が比較的大成した、すでに一家を成した人口学者の発表・討論を中核にしているのと比べて、若い血の躍動する、そして独創性のある研究業績が多いことが特筆される。

今回のミネアポリス大会は部会が64もあり、人口増加、出生力、死亡、結婚、家族、人口推計、人口推定論、高齢化、人口モデル、出生力を決定する社会経済的要因等を広く網羅する範囲の広さ、きめの細さで出色の大会であったと言えよう。一番多い時では、同時に6部会も同時に進行しており、出席の選択に困る程の内容の豊富さ、発表者・討論者の人材の多彩さであった。

一つ大いに感じたことは、人口学の計量化・数量化が強くなっていることで、分析に例えば proportional hazard model, log-linear model, multi-state life table, シミュレーションが日常茶飯事として応用されていることであり、人口学の数学化の傾向を感じさせるのである。とくにコンピュータの利用が最近常に容易になったこと、データがより豊富に取られるようになったことが理由として挙げられよう。筆者はとくに、出生率の予測に関する方法論の研究、形式人口学の最前線、家族人口学、死亡分析の発展等に関する部会に出席したが、その数学化は背景的知識がないと充分ついて行けない位の、非常に複雑化した状況を示していた。

会長の Samuel Preston は会長演説の中で、高齢化恐るに足らずの議論を展開し、高齢者は選挙権を持つが、青少年人口は持たないこと、将来高齢者のニードを充たす高齢産業がブームを起し、他の年齢グループからの資本移転をもたらすことを述べたが、我が国などでは見られぬ画期的現象だと理解され得る。

(河野稔果記)